

ラムージョ版

『ニコロ・ディ・コンティ旅行記』¹



図1 ジェノヴァ図（1457年 作者不詳 フィレンツェ国立中央図書館蔵）1bis

この小編は、ラムージョ版ニコロ・ディ・コンティ「旅行記」の全訳である。同版は、その旅と各地についての前半と主にインディアのことの後半に分かれ、冒頭に編訳者ラムージョの解説がある（本稿では前半の最後に置く）。テキストは、前半はミラネージ版『航海と旅行』に、後半はインターネット・アーカイヴ liberliber.itによった（巻末のイタリア語原文は全て後者より）。以上の詳細については、本稿前半の註1を参照されたい。

(前半)

フィレンツェ人ポッジョ殿により書き記された ヴェネツィア人ニコロ・ディ・コンティ旅行記

² ヴェネツィア人ニコロ・ディ・コンティは、若かりし頃＜商人として＞ソリア [シリア] のダマスコ [ダマスカス] 市にあり、アラビア語を学び、六百からなる隊商＜（ふつうキャラヴァンと呼ばれる）＞とともに商品を携えて出立し、大砂漠のあるペトレアと呼ばれるアラビアを通り³、次いでカルデア地方、そしてエウフラテス川にまで至ったのであった。

1 アラビア・ペトレアの砂漠を徘徊する悪魔

同地方の中央にあるその砂漠で驚くべきことが起こったという。すなわち、真夜中頃何か大きな物音が聞こえたため、野にいるアラブ人が盗みにやってきたのだと思って危険を心配し、皆起き上がった。そうしていると、＜馬に乗った旅人のような＞大勢の人間が何も悪さすることなく黙ってテントの側を通り過ぎて行くのが見えた。これを見た商人のある者は、前にも何度かこうして徘徊するのに出会ったこともあり、あれは悪魔で、ああして砂漠をうろつく習慣があるのだと断言した。

2 今日バルダッコと呼ばれるバビロニア市、バルセラとカルクム港、オルムズ島、ペルシャの市カルツィア

大層由緒深い古代バビロニア市の一部はエウフラテス川のほとりにあり、周囲十四マイル、住民は今そこをバルダック＜バルドキア＞ [バグダード] 市と呼んでいる⁴。中心をかのエウフラテス川が流れ、十四のアーチをもつ＜両端に強固な塔のある＞堅固な橋が架けられ、市の両側を結んでいる。市内には今なお古代の建築物の遺跡や基礎が多数見られる。市の上方には城塞があり、王宮はとても堅牢で美しい。この地方の王は極めて強大である⁵。その王宮の向かいから川を二十日下ったが、兩岸にとっても美しい地域や人の住む多くの島

が見える。次いで陸路を八日歩くと、バルセラ [ブッソラー] なる地に着く。さらにそこから四日でペルシャ湾に至るが、そこは海が大洋のごとく満ち干する。そこを五日間航海するとカルクム [コルクス] 港、次いでオルムズに至った。オルムズは同湾の小さな島 [ケシム島] で、本土から十二マイル離れている。同島を発ち、湾を出てインドに向かうと、百マイル行ってペルシャのとても名高い港カラツィア <カラカティア> 市に着く。そこでは大量の商品が取り引きされている。彼は、しばらくそこに滞在してペルシャ語を学んだが、それは後に大いに役立った。また同様に、その国の衣装を身にまとい、遍歴の間中身に付けていた。次いで、ペルシャ人やモーロ人の仲間たちと船を雇い⁶、まず最初に共に忠実で信頼できる仲間であることを互いに厳かに誓い合った。

3 カムバイア市、ならびに夫の死とともに生きながら焼身する女性の習わし

こうして隊商と共に航海して一カ月でカムバイア [カンベイ] というとても立派な市に着いた。同市は、インダス川が海に注ぐ第二の支流のほとりの地 <インダス河口を過ぎて二つ目の湾> にある。この国には、サードニックス [紅縞瑪瑙] と呼ばれる宝石がある。また女性は夫が死ぬと、<葬儀を盛大なものにするため> その死者の権威によって一人あるいはそれ以上、生きたまま一緒に焼身する風習がある。すなわち、夫に最も親しくまた愛された者が自ら夫の首に腕を巻き付けて、殉死するのである。残りの妻はその後、燃え盛る火の中に身を投げる。この儀式については後にさらに詳しく述べる。

4 生薑を産するパカムリアならびにデリー市、生薑についての説明

さらに進んで二十日間航海すると、海岸ぞいにある二つの都市パカムリアとデリー <ヘリー> に着いた。この国では生薑が生え、彼らの言葉でベレディ、ジェベリ、デリー <ネリー> という。生薑は高さ一ブラッチョ <二キュビット> ほどの植物の根で⁷、葉は <大きく> イリオス [アイリス] という青い百合に似ている <が皮は堅い>。葦の根のように生え、それから生薑をとり、その上に灰をかけて三日間天日に干して乾かす。

5 著名なビジナガル市の位置、武器を持つに適した者は何人いるか、彼らの風習

そこを出発して海から約三百マイル内陸に入ると、ビジナガル<ビゼネガリア>という大きな市に来た⁸。周囲六十マイル、高い山の麓の谷にあり、城壁は山にまで伸びて市を取り巻き、その囲みは下から見上げるとより大きくまた美しく見える。そこには武器を取るに適した人間が十万<九万>人いる。この住民は好きなだけ妻をもつことができ、彼女らは夫が死ぬと共に焼身する。同市の王はとても強大で、インドの他のすべての王に勝り、一万二千人にいたる女をもち、そのうち四千人は彼の行くところ徒歩で付き従い、もっぱらその食事の世話しかしない。別の四千人は、立派に身支度した<して>馬に乗って恭しく付き従う。残りの者は男のかつぐ豪華な輿に乗り、そのうち二千<二、三千>人は、彼が死ぬと自ら共に焼身するという条件の下に妻となったということである。またそれは大変な名誉とみなされている。

6 ペラゴンガ、プディフェタニア、オデスキリア、チェンデルギシアの各市、聖トムマーズの遺骸のあるマレプル市、ならびにマラバール地方

同王に服属しているペラゴンガ市はその立派さにおいて劣ることなく、周囲十マイルあり、ビジナガルから八日行程離れている。そこから陸路二十日でプディフェタニアという海ぎわの町に着いた。その途中二つのとても綺麗な町、オデスキリアとチェンデルギシア<チェンデルギリア>を通ったが、そこは赤いビャクダンを産する。さらにそこからニコロは、マレプル〔マイラパール〕という無数の火のある町にやって来た。そこはガンジス川側のもう一つの湾<インダス川の彼方の第二の湾>〔ベンガル湾〕の海岸にあり、そのとても美しい大きな教会に聖トムマーズの遺体が厳かに埋葬されている。住民はネストリウス派というキリスト教徒<異端者>であり<この市に千人いる>、彼らは私たちのもとでのユダヤ人のように、インド中に散らばっている。この地方全体がマラバールと呼ばれる⁹。

7 カエル市ではいかに真珠を採るか、ある樹の葉のとてつもない大きさ

この市に着く前にカエル<カヒラ>という別の町があり、真珠が採れる。また実はならないが葉が長さ六ブラッチョ<キュービット>、幅も同じくらいある樹が生えているが、葉はとても薄いので、束ねると片手で握れる¹⁰。この葉はその地方では紙の代わりに書くのに用い、雨の時には濡れないよう頭にかざし、これを広げて三、四人一緒にかむって歩いても濡れることはない。

8 名高いゼイラム島、そのの宝石、シナモンとそれから得られる有益なもの の説明

この国の南端<この湾の中央>に名高いゼイラム [セイロン] 島があり、周囲二千<三千>マイル、ルビー、サファイア、ザクロ石それに雌猫の眼と呼ばれる石が掘り出される。また良質のシナモンが沢山あり、その樹は柳に似ているがもっと太く、枝は上に伸びず横に広がる。葉は月桂樹に似ているが、いくぶんそれより大きい。皮は枝のが最良で、とりわけ薄いほど良い。幹の皮はそれより厚く、味が劣る。実は月桂樹の実に似ており、それからとても臭いの強い油が採れる。インド人はそれを塗り薬として用いる。皮を剥いだ後、樹の残りは燃やす<燃料にする>。

9 バラモンの暮らし

この島には湖があり、その真ん中に周囲三マイルの王都があるが、そこを治めるのはバラモン階層出身者に限られる¹¹。彼らは他の人間たちより賢者だとみなされており、したがって生涯にわたって哲学の研究以外携わず、占星学と学究生活に打ち込む。

10 古くはタプロバーナと呼ばれたスマトラ島、そのの住民の残忍な風習。 金、樟脳、胡椒をいかに産するか、胡椒についての説明。ドゥリアーノ という果物、アンドラマニア島

次いでスマトラ<タプロバーナ>というとても大きな島に渡ったが、それは昔の人からタプロバーナと呼ばれていた<土地の人からシャムテラ[スマトラ]

と呼ばれている>もので、周囲二千マイルある¹²。そこに一年滞在した。<市は周囲六マイルあり、同島の交易の中心である>。次いで順風のもと二十日行程航海したが、右手にアンドラマニア<アンダマニア>という名の島を過ぎた。黄金島という意味で¹³、周囲八百マイルあり、住民は人肉を食する。だから、この島には嵐によって打ち上げられるのでなければ誰も寄りつかない。彼らの手の届くところにやって来ると、この残酷で非道な連中に捕らえられ、バラバラにして食べられてしまうからである。上述のタプロバーナ島<周囲六千マイル>でも、人々はとても残忍で極悪の風習をもち、男も女も皆とても大きい耳をしており、それに金の棒を突き刺して貴石を付けているということである。彼らの衣服は麻、綿あるいは絹で、長さは膝までである。男は好きなだけ女を持つ。彼らの家はとても低いが、これは太陽の酷熱を防ぐためである。みな偶像崇拜教徒である。

この島では、他のどこよりもずっと大きくまた長い胡椒を産し、樟脳や金も大量にある。胡椒のなる木はセイヨウキズタの木に似ている。粒はビヤクシンの実に似た緑色で、その上に灰を撒いて日に乾かす。この島ではまたドゥリアーノ [ドリアン] という果物ができ、緑色、スイカほどの大きさで、開けると中に実が五つあり、オレンジに似ているがもう少し長く、素晴らしい味で<味は様々で>、食べてみると凝固したバターのようなものである。

11 タプロバーナ島人は人肉を食し、その頭を貨幣の代わりに商品の取引に用いる

同島のバテチ [バッタ] という一地域では住民は人肉を食し、近隣と絶えざる戦争下にある。また彼らは人間の頭を宝物として取っておくとのことである。敵を捕まえると頭をはね、その肉を食らった後頭蓋骨つまり骨を貨幣として用い、何か物を買いたいときには、商品と交換にその値打ちによって頭蓋骨を二つ三つ与えるのである。だから、家に頭をたくさん持っている者ほど金持ちとみなされる。

12 テルナッサリ市、多数の象、そこに生えるブラジルスオウ。チェルノヴ

ェム市、ガンジス川の大きさ、そこに生える葦

タプロバーナ島を発ち、大嵐の中を十七<十六>日でテルナッサリ市に着いた¹⁴。そこは同じ名の河口に位置している。周辺の国にはどこも象がいっぱいおり、ブラジルスオウが沢山生えている<一種のツグミが沢山いる>。さらにそこから長く海<海陸>を旅し、ガンジス河口に着いた。そこを遡って二十<十五>日で同川沿いのチェルノヴェムという町に着いた。この川はとてつもなく大きく、真ん中にいるといかなる土地も見えない。ある地点では幅十三<十五>マイルあるとのことである。この川の岸には、人間一人では抱えられないほど太く長い葦が生え、それで漁船のような小舟を造る<そのためには一本で十分である>。皮は手のひらほどもあり、節と節の間隔は人間の背丈ほどもある。そんな大きさだから、かの川を渡る小舟が作れるのである。かの川にはワニや我々の知らないいろいろな魚がいる。両岸にはずっと村や町、とても綺麗な庭園、無数の果実とりわけイチジクに似た蜂蜜より甘いムーサ〔バナナ〕のなる素晴らしい果樹園がある。また、我々がインド胡桃〔ココナツ〕と呼んでいる果物のなるヤシや、その他さまざまな果実のなる木も生えている。

13 金や宝石がふんだんにあるマアラツィア市はガンジス川のどこにあるか。ラチャ川

そこを発ってガンジス川を三カ月航行し、その間に四つの立派な市を過ぎ、マアラツィアというとても強大な市に至った。そこには大量の金、銀、大小の真珠、宝石、アロエの樹がある。そこから東の方にある、カルボンキ〔紅水晶〕という貴石を産する山に向かって道を取った。そしてしばらく<十三日>して再びチェルノヴェム市に戻り、そこから<さらに>ブッフエタニアに向かった。そこを発ち、一カ月航行して後<陸路>ラチャ〔アラカン〕川に着いた。その川を遡ること六日、岸ぞいにある川と同名のとても大きな市に至った。

14 アヴァ川と市、そのの愉快的な風習

その市を発って山と砂漠<人けのない山>をいくつか過ぎると、十七日で平地に至り、そこを十五日歩いて、ガンジス川よりも大きい川に出たが、それは

住民からアヴァ<ダヴァ> [イラワジ川] と呼ばれている。それを何日も<一カ月>遡ると、アヴァという他のどの町よりも立派で豊かな市があった。周囲十五マイルあり、住民はとても楽しく陽気だが、あらゆる設備の整ったとても綺麗な家に住んでいるにもかかわらず、一日中町中に散在する居酒屋にたむろし、そこでは同じように多くの若い娘たちがいて相手をしてくれる。

そこには愉快的な風習があるのだが、だだ笑って楽しむためだけでも、そこで見聞きしたことを語らずにはおられない。すなわち、そこには生活の糧を稼ぐために、金や銀や銅でできたドングリほどの大きさの、とても精巧な小さな鈴を売ることを以外何も仕事をせずに暮らしている老女たちが何人かいる。そして男が女性と懇ろになっても良い年齢、つまり結婚したい年頃になると、彼女たちはその男のもとに行き、その鈴を陰茎の皮と肉の間に埋め込んでやる。でないと男は拒まれるからである。男は身分によって金のか銀のを買い、それを売った女自身がなん箇所か皮をはがし、中に埋めて縫い込むと、数日で元通りになる。人によっては一ダース、あるいは好みによってそれより多くあるいは少なく埋め、後で縫い合わせ、数日するとくっつく。こうした支度をした男は女たちに大いに歓ばれ、彼らの多くは道を歩くとき、身に付けているその鈴の音が聞こえることを非常な名誉と考えている。彼も、そうした老女たちからこの支度をしたら満足するだろうと何度も求められたが、自分の痛い目を他人がかかって楽しむような話には決して乗らなかった¹⁵。

(かなりの行欠落)¹⁶

15 マンジ地方、その住民の風習、象を捕らえて飼い慣らす方法

この地方はマンジ<マチヌス>といい、象が無数にいる¹⁷。王は一万頭飼っており、戦争に用いる。その背に櫓を乗せ、そこに槍・弓・石弓をもった戦士が八人から十人乗ることができるからである。この象を捕らえる方法は<ふつう次のようだが、プリニウスに述べられているのと一致する¹⁸。すなわち>、つがいの時期に雌の飼い象を利用して、それを放し飼いするように作られた場所<森の中>に連れて行き、二つの大きな戸、一つは入り口もう一つは出口、

のついた囲いを巡らせる。そこに雌がいることに気づくと、雄は最初の戸に入って会いにやって来る。雄を見るや否や雌はもう一方の戸から逃げる。雌が出るとすぐに戸を閉める。そこに千人以上の者が道具を持って待ち構えていて、呼ばれるとごく太い綱を持って駆けつけ、ある者は囲いに上り、別の者は囲いの穴から入って、その綱で象を捕らえるための罾を仕掛ける。すっかり手はずが整うと、罾の張られた方向に人が姿を現し、象はそれを見て踏みつぶそうと怒って駆けてくる。駆けながら罾にはまる。別の者たちがその後すぐ縄を投げて、象を動かないようにし、地中に頑丈に突き立てた帆柱のような太い木にその後ろ足をきつく縛る。そしてそのまま飲み物も食べ物も与えず三、四日ほうっておく。それが過ぎると毎日少しずつ草をやり、こうして十五日すると大人しくなる。次にそれを二頭の飼い象の間に挟んで町に連れてき、あちこち連れ歩く。かくて十日もすると、他と同じように飼い慣らされるのである。

16 象を飼い慣らして育てるもう一つの方法、象の驚くべき知性、この国の風習と宗教

別の地方ではまた次のようにして象を飼い慣らすという。周囲の閉じた小さな谷に象を追い込み、雄と雌を分け、雄だけそこに残し、餌を与えない。三<四>日たつとそこから連れ出し、飼い慣らすために造った狭く険しい別の所に連れて行き<そこで優しくする>。王たちはこれを購入して利用する。飼い象は米とバターと草を餌とし、野生象は草と木の枝を見つけて食べる。飼い象は一人で飼育でき、ただ頭に鉄の輪をめぐらすだけである。この動物はとても利口で、戦闘にあっては射かけられた槍であれその他の武器であれ全て足の裏で止め、上に乗っている者が傷を負わないようにする。この地方の王は白い象に乗っており、その象は貴石をちりばめた足まで届く金の鎖を首に巻いている¹⁹。

この地の男たちはただ一人の女で満足し、男も女もみな鉄の針で体を刺し、その痕に決して消えない色を付ける。だからいつも体に絵が描かれている。皆偶像を崇拜するが、朝眠りから覚めると東に向かって手を合わせ、次のように唱える、「三位一体の神よ、その法にて我らを守り給え」²⁰。

17 その葉を紙の代わりに書くのに用いる樹、それになる果実

この地には、オレンジ<ザクロ>に似ているが汁が多くもっと甘い一種のリンゴがある。また、タルと呼ばれる樹があり、その大きな葉の上に字を書く。インドではカムバイア市を除いてどこも紙を使わず、また見あたらないからである。この樹には大きなアブラナ<カブラ>に似た実〔マンゴー〕がなる。樹皮の下に含まれている部分は濃縮した液のように柔らかく、食べてみるととても甘くておいしい。しかし、皮はさほど味良くない。

18 この国にいる蛇の種類、食べてみるととても美味しいこと、ある種の赤い蟻

この国には驚くべき蛇がおり、足はなく、太さは人間くらいで、長さ六キュビットある。この国の住民はそれを焼いて食べるが、とても美味しく、大いに珍重する。また、小さな海老<蟹>のようなある種の赤い蟻を胡椒で味付けして食べるが、彼らにとってはご馳走である。

19 象と戦う犀とおぼしき動物、その角の効能

そこにはまた、頭は豚、尻尾は牛に似、額に一角獣のような角があるが、もっと短く長さ一ブラッチョ<キュビット>ほど、の動物がいる。色と背丈は象そっくりで、いつもそれと戦っている。その角はあらゆるものを解毒すると言われ²¹、そのため非常に高く値踏みされる。

20 この国にいるある種の牛、そのたて髪がいかに珍重されるか

カタイオ<カタイ>に近いこの国の最後の所<上方>には、白と黒の牛〔ヤク〕がおり、馬のようなたて髪と尻尾のあるのがより重んじられる。しかし、さらに密で細く羽のように軽く、足元まで届くほど長いたて髪をしたのは、銀と同じ重さで値が付けられる。そのたて髪から扇子を作るのだが、それは偶像や王に仕えるときしか使わないからである。また、それで金銀をちりばめた房飾りを作って馬の背につけ、そこに広げて背中全体を覆い、さらに首にも掛け、そこから胸に垂らして飾る。また騎士は、大いなる高貴の印として槍の穂先に

つける。

21 由緒深いカムバル市、その素晴らしい城塞、人々の風習、キンサイ市

このマンジ<マチヌス>地方の彼方にはカタイオ<カタイ>という、世界のどこよりも優れた地があり、君主はグラン・カーネ〔大カーン〕と呼ばれ、その言葉で皇帝という意味である。首都にして最も壮麗な市はカムバル<カムバレスキア>〔カンバリク・大都〕といい、方形に造られており、周囲二十八マイルある。その中心にとっても美しく堅固な城塞があり、中に王宮が置かれ、四隅にはそれぞれ防禦用の丸い砦が築かれている。そのどれも周囲四マイルあり、あらゆる種類の武器と攻城具がしまっており、何か事が起こったときに備えて兵が待機している。また王宮から天井付きの城壁を通じて上述四つの砦に行くことができ、これはもし国民が王に反旗を翻したならば、いつでもそこに避難できるようにである。その町から十五日行程の所に、キンサイ<ネムプタイ>というとても大きな市がもう一つあるが²²、それは最近この王によって再建されたものである。周囲三十マイルあり、どこよりも人口が多い。これら二つの市には、<ニコロの言によれば>イタリアに似た家屋や建物や品々があるとのことである。人々は穏和で思慮深く賢明で、いままで述べたどこよりも裕福である²³。

22 ザイトン港、パウコニア市、そこに産する葡萄の木と果実

次いでアヴァを発ち海に向かって川を下ると、十七日で<かなりの大きさの川〔ペグー〕の>河口に着いたが、そこにザイトン<クセイトナ>という大きな港があり²⁴、そこから海に出た<その川を遡っていった>。そこから十日でパウコニア<パンコニア>という人口の多い大きな町に着いた。周囲十二マイルあり、そこに四カ月滞在した。ここだけは葡萄の木が生えているが、それも僅かである。インドはどこも葡萄酒も葡萄の木もほとんどない。で、この葡萄からも葡萄酒は作らない。それは樹の上になるが、もし彼らの偶像に犠牲を捧げずに収穫すれば消えてなくなり、もう見ることもできないとのことだった²⁵。そこはパイナップル、栗、杏、小さい緑色の瓜、白いビヤクダン、樟脳を産す

るが、樟脳は木の中にあるものの、皮を切る前に神々に犠牲を供えなければ、消えて見えなくなる。

(数行欠落) ²⁶

23 および大ジャヴァ島にいかに至るか

内<中央>インドには世界の最果ての方向に二つの島があって、ともにジャヴァと呼ばれ²⁷、一つは周囲三千マイル、もう一つは二千マイルあり、東の方に位置する。大小の名によって二つを区別し、帰路一カ月ずっと航海してそこに達した<これら島は帰路のルート上にあった。共に大陸から一カ月の航海分離れている>。一方の島からもう一方まで、一番近いところで百マイルの距離がある。そこに<旅を共にした>妻と子供たち、隊商とともに九カ月留まった。

24 ジャワ島民の残忍さと非人間的な風習

この島の住民は他のどの国民よりも非人間的で残忍であり、<犬>猫、ネズミその他の不潔な動物を食らい、残忍さの点で他の全ての人々に勝る。人を殺すのは戯れであり、そのためになんら刑を受けることはない。借りを返せない者はその奴隷となるが、服したくない者はむしろ自ら次のような死を選ぶ。刀を抜いて通りに行き、出会った者を手当たり次第切り殺し、自分より強くて殺す者が現れるまで続ける。その後この死者の貸し主が来て、彼を殺した者を呼び出し、自分の貸しを要求し、その者はそれを返済するよう裁判官から強制される。

25 武器の出来具合を試す残酷な方法

シミタツラ [新月刀] つまり刀を買うと、それを試すため自分の前に現れた最初の人間の胸に突きつけて切りつけ、こうして剣先と刃でその焼き入れ具合をみるが、そのためになんら罰を負うことはない。通りすがりの者は皆この傷を見、武器がまっすぐ突き刺さり、一撃で殺していれば、それほど素晴らしい傷を負わせたことを皆に賞賛される。皆、欲望を満たすため、好きなだけ妻を

めとることができる。

26 鶏を闘わせてする遊び

彼らの間で一番よく行われる遊びは鶏を闘わせることで、それぞれ自分の鶏が勝つことを願っているいろいろな種類のを飼っている。そうでなくそれを見物するだけの者も、たいてい自分たち同士でこの闘いに賭ける。そして最後に勝ち残った鶏に賭けた者が金を勝ち取る。

27 大ジャヴァにいる鳥の種類、サンダイ島とバンダン島、そこに産するナツメグとチョウジ

大ジャヴァには、足がなく鳩くらいの大きさで、羽がとても細く尻尾の長い、いつも樹の上にいる鳥がいる。その肉は食べないが、羽と尻尾は頭飾りに使うのでとても高価である²⁸。東に十五日航海すると二つの島があるが、一つはサンダイといい、ナツメグとその花であるマチス [メイス] を産する。もう一つはバンダン島で、そこにしかチョウジは産せず、そこからジャヴァ島にもたらされる²⁹。

28 バンダン島にいる三種のオウム、ならびにその周辺の家

バンダンには三種のオウムがおり、一つは赤く嘴は黄色、もう一つは様々な色をしており、ノーロ<ノーリ>と呼ばれ、輝かしいという意味である。二つとも鳩ほどの大きさである。三つ目は白く鶏ほどの大きさで、カコス<カキ>と呼ばれ、他のより良いからより高価なという意味である。見事に話すのを覚え、話しかけられたことに答えるからである。両島とも人間は黒色である。これらの島の彼方の海は航行不能で、絶えざる風と嵐のためとても航海することはできない。

29 ジャヴァからいかにカムパア市に航海し、そしてマラバールにあるコルムに戻ったか

かのニコロは、ジャヴァ島を発って旅<商売>に必要な物を携えて西に向かい、カムパア<チャムパ>という海岸ぞいの市へと航海した。そこはアロエの

木、樟脳、それに金が大量にある。その旅に一カ月を費やし、次いでそこを發ち、さらに一カ月でコロウム<コロエン> [キーロン] という周囲十二マイルある立派な市に至った。そこはマラバール<メリバリア>地方にあり、コロビと呼ばれる生薑、胡椒、ブラジルスオウ、グロッサ<クラッサ>と呼ばれるシナモンが生える。

30 このマラバール地方にいる蛇の種類とその性質、いかに捕らえるか

この地方には長さ六ブラッチョ<エル>の³⁰、足のない蛇がいる。驚くべき動物で、邪魔しなければ誰にも危害を加えない。これは子供の姿を見るのを大いに喜び、そのため人間のいるところにやって来る³¹。頭はウナギに似ており、地を這うときや頭をもたげると、ずっと長く伸びる。後ろ側は、様々な色に塗られた人間の顔に似ている。魔法をかけて捕まえるが、それは彼らの間で広く用いられ、人に危害を加えぬようそのために作られたガラスの壺に入れ、素晴らしい見せ物として人々に見せる。

31 この地方の二つ目の種類の蛇、いかに捕らえるか

やはりこの地方<と別の地方>スシナリアの近くにもう一種の蛇 [ワニ] がおり、四本の足ととても長い尻尾を持っており、大きな犬ほどもある。狩をして捕まえ、後で食べるが、食べても害はなく、われわれがシカやオジカその他野生の動物を食べると変わらない。これからいろいろな美味しい食べ物を作る。その皮は様々な色をしており、とても綺麗だから覆いに用いる³²。

32 この地方の恐ろしい三つ目の種類の蛇、野生の猫に似たある動物

この同じ国にもう一種の驚くべき蛇がおり、長さ一ブラッチョ<キュービット>、ヤマコウモリのような羽があるとのことである。体にそって前後に並んだ七つの頭があり、木の上にいるのはとても早く飛び、他のどれよりも毒があつて、息だけでも人を殺す。さらにまた、空を飛ぶ野生の猫に似た動物がおり、前足から後足まで皮がついておいて、休むときはそれを折り畳むが、飛ぶときは羽の代わりに前足をはばたかし、こうして木から木へと渡るとのことである。

この動物を捕えようとする狩人は、それが疲れ果ててへとへとになって地に落ち、捕まえられるまで追いかける。

33 カキという木、それになるとても大きな果物、アムバというもう一つの果物

この地で、カキもしくはチッカラと呼ばれる木を見た。その根元にパイナップルに似た果実がなるが、とてつもなく大きいので一人ではその一つすら持てない。皮は緑色で少し堅いが、指で押しただけで割れ、その中にイチジクのような甘い実が二百五十か三百あり、一つ一つ薄い皮で分け隔てられており、さらにその中に栗のような味と堅さのガスを発生さす別の実があり、やはり栗のように料理し、火鉢にいれると、割れ目を入れなければはじけて火から飛び跳ねる。皮は牛の餌にする。中の実には皮はない。この木の根は時に地下で実をつけ、他より良質で味がよい。これを王や貴顕への贈り物にする。木は大きなイチジクに似ており、葉はシュロのように分かれている。木材はツゲに似ており、いろんな用途に使い、そのためとても高価である<この木の名はカキという>。また、アムバ〔マンゴー〕という別の果物があり、濃い緑で胡桃に似ているが、桃より大きい。皮は苦いが、中は蜜のような味がし、熟する前に水に漬けて酸味を取り>、われわれが青いオリーブにするのと同じように調味する。

34 ソルチャン河口にあるコーチン市、その川岸には夜人間の姿をした魚がやって来る

ニコロは、コロウム<コロエン>市を後にして三日でコーチン市に着いた。周囲五マイル、コルチャン河口にあり、そこからその名を取っている。その川を数日航行しているとき、夜岸に火が沢山燃えているのを見たので、漁師だと思ってあんなところで夜中に何をしているのかと尋ねた。すると仲間たちは笑いだし、「チッペ<イスペ>だ、チッペ<イスペ>だ」と答えた³³。魚か怪物かともかく、人間の姿をしており、夜になると水から出てきて薪をかき集め、石と石をぶつけて火花を出し、川岸でその薪に火を付ける。川には魚がいった

いおり、その火の光に引き寄せられて来たところを捕らえて食べるが、昼はずっと水中にいる。これが捕まえられたことが何度かあるが、雄も雌もその姿は人間とまったく変わりなかったと彼に語った。この国にはコウロム<コロエン>と同じ果物ができる。

35 コロングリア市、パリウリア市、メリアンコタ市、名高いカリカット市、そこに産する胡椒その他の香味料、住民の風習

そこを発って、もう一つの川の河口にあるコロングリア<コラングリア>市に向かった。後さらにパリウリア市、そしてメリアンコタ市に至った。彼らの言葉で大きな市という意味で、周囲九<八>マイルある。そこからカリカット市に至ったが、そこは海岸にあつて周囲八マイル、その交易と商品でインド随一の名高い市である。この国は胡椒、ラック、生薑、大きいシナモン、チェブリー<ミロバラン>、ゼドアリを大量に産する。<この地方だけは>女は欲望を満たすため好きなだけ夫を持ち、時として十人以上持っている者もいる。男たちは女を娛しむ時間を自分たちの間で分ける<男たちは、夫と別れて暮らしている妻たちを共同して養う>。女の家に行った者は、その戸口に目印を置き、別の男がきてもその印を見て戻って行く。誰に子供を託するかは女の自由だが、子供は父親の財産を相続せず、孫がする。

36 カムバイア市、その香味料、聖職者の生活、牛

次いでニコロはそこを後にして、十<十五>日でカムバイア市に着いた。北方に近い地<海岸>に位置し、周囲十二マイルある。ラベンダー、ラック、ミロバラン、インディゴそれに絹を豊富に産する。そこにはバンカーニ<バチャリ>と呼ばれる一種の聖職者がいる³⁴。彼らは一人の女性で満足し、その女性は夫が死ぬと共に身を焼くことを法によって義務づけられている。この聖職者たちは、命あるものは食せず、果物、米、牛乳、木の实<野菜>しか食べない。野生の牛がたくさんおり、馬のようなたて髪をしているがそれより長く、角もとても長く、頭を少し後ろに曲げると尻尾に届くほどである。それほど大きいから、その角を住民は水を運ぶ壺や、あるいは外出時の飲物を入れる容器の代

わりに使う。

37 ゾコテラ島、アロエを産する

そこから再びカリカットの方に戻り、海路ゾコテラ<セクテラ> [ソコトラ] という島に行った³⁵。そこは西に向かって大陸から百マイル離れたところにある。周囲六百マイル。その旅に二カ月費やした<その島に二カ月滞在した>。この島には、ココトリーノ<ソコトリン>と呼ばれる素晴らしいアロエが生える。この島の大部分にネストリウス派のキリスト教徒が住んでいる。

38 二つの島、その一つには男たちもう一つには女たちと分かれて住んでいる。そこの大気の配剤により来す結果

この島の向かい五マイルと離れていないところに二つの島があり、相互に三十<百>マイル隔たっており、その一つには男だけ、もう一つには女が住んでいる³⁶。時々男たちは女たちの島に行き、同じように女も男の島に行くが、三<六>カ月経つ前に発ってそれぞれ自分の島に戻ることを厳しく決められている。定められた期間を越えて滞在すると、天と大気の配剤により直ちにその者は死にいたる³⁷。

39 アダム市、ニコロがヴェネツィアに戻るにあたって取ったルート、エジプトの市カッラスに着いたとき彼の妻が二人の子と二人の召使い共々死んだ次第

そこを発って海路五日で、美しい建物の立ち並ぶ名高く豊かなアダム [アデン] 市に至った。そこからエチオピアに向かい、七日でバルボラという港に着き、そして紅海を一カ月航行してジデム<ジッダ>港に着いた。さらに二カ月かかった困難な航海の末シナイ山近くで上陸することにし、そこから砂漠を横切ってエジプトの市カッラス [カイロ] に、妻と四人の子と四人の召使いと共に着いた。哀れにもそこで彼女は、二人の子と二人<全部>の召使いともどもペストで死亡した。かくてかのニコロは、海陸にわたるかくも大きな苦労と危難の末、ついに二人の子と共に無事その祖国たるヴェネツィアに戻り来たった

のであった。

ヴェネツィア人ニコロ・ディ・コンティの旅行記についての論³⁸

すでに百年以上も前、さるヴェネツィア市民ニコロ・ディ・コンティが東方インドをくまなく巡り、その旅の記録がものさされていると知って、それもまた本巻に収めて読者の用に供せねばならぬと思いついた。で、ヴェネツィア市のみならず他にもイタリアの都市をいくつも懸命に探したが、その甲斐も虚しかったところ、リスボナー市においてポルトガル語で出版されていると聞き及んだ。そこでそれを我が国語に訳せば、かの我らが市民の功績を世に知らしめることができようと考えた。ところがそれを読んでみて、旅の順路においても町や土地の名前においても、聞いたことも読んだこともなく、ひどく損なわれかつ不正確であることを発見した。かくして、おそらくいつの日かもっと完全で正確なものが見つかるだろうし、その時にはそれを世に出せば読者に満足戴けるだろうと考えて、これは捨ておいたほうがよいと思っていた。一方ではしかし、これほど損なわれてはいるが、最近ポルトガル人によって発見されたいくつかの町の名がもう何年も前から知られていたのをみて、この地域のコスモグラフィーを楽しみにしておられる方々には少なからぬ喜びを提供するのではなかろうかと考え直し、ここにあるがまま世に問うことにした次第である。

この旅行記について、読者諸氏によりよく理解して戴くため、いくらか説明を加えておく必要があるかと思われる。かのニコロ・ディ・コンティは、インド中を巡り二十五年後に帰還したのだが³⁹、生命の安全を計るためキリスト教信仰を捨てざるをえなかった。しかし帰国した以上、その罪の赦しを得るため教皇のもとにまかり出なければならなかった。教皇はエウゲニウス四世といい、当時フィレンツェにあったが、時に一千四百四十四年のことである⁴⁰。祝福の後猊下は彼に、贖罪としてその旅についての真実をすべて、有能な秘書官たるフィレンツェ人ポッジョ殿に語るべきことを申し渡した⁴¹。そしてポッジョ殿はそれを丹念にラテン語で書き留めたのである。そして何年も後その文書

のことが、次のようにしてポルトガル王ドン・エマヌエル一世陛下の知るところとなったのだが、それは時に一千五百年のことであった⁴²。当時、ご自分のカラヴェラ帆船をいかに全東方インドに至らしめるか以外陛下の念頭になかったことは全ての者の知るところであったから、このニコロ・ディ・コンティの旅行記が、船長やパイロットに大いなる光明と知識を与えるであろうと進言され、かくしてその命により、さるヴァレンティーノ・フェルナンデスによってラテン語からポルトガル語に訳されたというわけである⁴³。彼は陛下に捧げたその序文で、なかでも次のように語っている：「私がこのヴェネツィア人ニコロの旅行記を、マルコ・ポーロの書に続いて読まれますようその翻訳を手がけましたのは、インドの事ども、すなわちモーロ人であれ偶像教徒であれ、かの町や人々、そこに産する香料、宝石、金銀の大なる利益や豊かさについて陛下の家臣の方々の注意を喚起し、知らしめることによって、大いに陛下のお役に立つのではないかと思ったからにございます。また何よりも、このニコロの旅行記は、とりわけ最近我々が発見いたしましたカリカットやコーチン以外のインドの他の都市について語っておりますこととて、ご自分のカラヴェラ帆船をかくも長途の危険な旅に送り出し給う陛下のご心労をお慰め申し上げるためにございます。さらにはまた、マルコ・ポーロの書に証言を加えるためにございます。すなわち、彼はグレゴリウス十世の御世に東方の地、北東と東の方に参りましたのに対して、続いてこのニコロはエウゲニウス四世の御世に南方に向かい、かのマルコ・ポーロによって記されたのと同じ地を発見いたしました。以上が御意により、私がこの翻訳の労を身に引き受けました主たる理由にございます」。

この言葉から、これら二人のヴェネツィア人の旅行記が、かの国王陛下にとっていかに重要で信頼すべきものであったかが分かるし、スマトラ島、大小ジャワ、ゼイラム、マラバールやデリーの地、その他昔のギリシャやラテンのどの書物にも記されていなかった多くの島や国がすでに二百五十年前かのマルコ・ポーロ殿の書に書かれており、それが今のポルトガル人パイロットたちによって再発見されたことを考えると、まことにもって驚くべきことである。しかしながら私をさらに驚かせしめるのは、かのマルコ・ポーロ殿が、カタイオ

の皇帝大カーンもマンジ地方の国民もみな交易を行い、上述の島々に香料の獲得に人を遣っていたと書いており、またこのニコロ・ディ・コンティも陸路そのマンジ地方にまで至り、帰路ザイトウンの港から船出して海路大小ジャワ島に至っているにもかかわらず、近年インドに赴いたポルトガル人船長たちは、陸路からは常時タウリスやコンスタンティノーブルの人々がその商品を携えてやって来ているにもかかわらず、そのカラヴェラ帆船を、これほど豊かで金銀あふれるあの大国にまで乗り入れ、海路による航路を開拓しようとしなかったことである。そうせざるを得なかったのはしかし、それなりのより大きく深い理由によるものと推測されるし、それに私の与り知らぬことであり、また知ろうとも思わない。私はただ、多くの人から聞いたり読んだりしたことを知るだけで十分である。すなわち、かのインドは無数のタルタル人によってすっかり包囲され、彼らは海路はできないものだから、絶えず陸路で荒らし回って略奪している（ちょうど哀れなイタリアがドイツ人、フランス人、スペイン人によってそうされているように）ということである。また最近一千五百三十二年、モゴリという国民どもが、大量の武器・武具をもってカンバイア国に到来し⁴⁴、カムパネル市とその周辺を破壊したという事実である。今はしかし、この話題についてこれ以上云々すべき時ではないようである。

1. Giovanni Battista Ramusio, *Navigazioni e Viaggi*, vol. II, a cura di Marica Milanesi, Torino Einaudi 1979, に収録された、‘Viaggio di Nicolò di Conti’ (pp.789-820), およびそれに前置された Ramusio, ‘Discorso sopra il viaggio di Nicolò di Conti veneziano’ (pp.785-7)。ラムージョとその『航海・旅行記集成』については、拙論「ラムージョ「マルコ・ポーロの書序文」(一)」『愛媛大学教養部紀要』第24号 1991、pp.53-106、参照。

コンティは、編者ミラネージの解説(p.783)によれば、1395年頃ヴェネト地方キオッジャの商人の家に生まれ、1425年から1439年にわたって15年間東方に旅したが、その間にイスラム教に改宗した。おそらくその最後の年カイロで、コプト教と接触すべく教皇から派遣されていた修道士 Alberto da Sarteano と出会い、帰国を勧められた。

帰還後、東西両教会合同の宗教会議のため同年フィレンツェにあった教皇エウゲニウス四世のもとに赴き、赦免を得た。そのおり、教皇の求めに応じて旅の詳細をその書記官 Poggio Bracciolini に物語った。ユマニストだったブラッチョリーニは、これに古典から得た自分の地理知識を加えて編纂し、自著 *De varietate fortunae* 『様々な運命』第4巻に収めた。コンティは、その後キオッジャに戻って商業を営み、1469年に没したという。

De varietate fortunae は、1447-8年頃からラテン語やイタリア語の写本で広まり、コンティの旅行記は *India recognita* (Cremona 1492)の中に出版された。それ以前に *Supplementum Chronicarum* (Venezia 1485-69)の中に断片的に採録され、さらにそれが1492年 *De ritu et moribus Indorum* として一本にまとめられた。1502年 Valentim Fernandes がそれをポルトガル語に訳し、*Marco Paulo, Ho libro de Nycolao veneto. O trallado da carta de huum genoues das ditas terras*として出版した。『航海・旅行記集成』収録のため、ラムージョがイタリア語訳に用いたのがそれである。近代語訳には、Hakluyt Society の *India in the Fifteenth Century*, ed, by R. H. Major, London 1857, がある。今回の和訳にあたっては、*De varietate fortunae* のラテン語原文も、ラムージョが底本としたというポルトガル語訳も目にする事が出来なかった。ハクルート・ソサエティーの英語版（以下 E）は参照できた。

ラムージョのイタリア語版（以下 I）は二部に分かたれており、前半はコンティが旅した各地の記述、後半は ‘Narrazione di Nicolò di Conti della vita e costumi degli uomini della India e di tutto il paese di Oriente, fatta a richiesta di molte persone che lo interrogavano’ と題され、主にインドの風俗習慣、とりわけ妻の殉死の風習と宗教についてのより詳細な記述である。これはその前半の訳である。またラムージョ版では、章立てがなされそれぞれ章題が付けられているが、ラテン語版からの直接訳である英語版にはいずれも見られない。これがラムージョの手になるものか、それともポルトガル語版からあったものか、和訳者には不明である。ただし各章に番号はなく、これは和訳者が便宜上付けたものである（以下、§で示す）。英語版との異なりは主なものを< >内に示したが、単なる表現の違いや語順の入れ替わりは取り上げなかった。コンティの旅のルートや地名については不明の部分が多く、地名・人名はほぼ全てイタリア語読みにし、慣用や原音のわかる場合は初出のところで [] 内

に示した。

1 bis. ジェノヴァ図（1457年）は、コンティ旅行記から多くの情報が取り込まれていることが知られる。同図については次号で取り上げる。

2. 英語版では冒頭に次の文がみられる：「インド内部に至ったニコロなるさるヴェネツィア人が、教皇エウゲニウス（当時二度目の滞在でフィレンツェにあった）のもとに⁴⁵、罪障消滅を願ってまかり来たった。というのも彼は、インドからの帰途紅海上エジプトの国境に着いたとき、己の生命に対する恐怖からといわんよりは同伴していた妻子の身に降り懸かる危険から、己が信仰を放棄せざるをえなかったからであった⁴⁶。私は、彼の話に熱心に耳を傾け（というのも、彼の口から大いに知る価値のある多くのことを聞いたからであるが）、学識者たちの集まりでも私の家でも、まことに記憶に止めまた書き留めるに値すると思われた多くの事柄について熱心に彼に質問した。彼は、そのかくも遠方の国々への旅について、インド人の状況や様々な習慣や風習のこと、また彼らの動物や樹木や香料のこと、それぞれいかなる地に産するかなどを博識かつ真摯に語った。彼の話は、全くもって真実であると思われ、作り話ではありえない。彼は、我々の記録に知られる限り、かつていかなる旅人が赴いたよりも遠くに至った。というのも彼はガンジス川を越え、はるかタプロバーナの彼方にまで旅したのだが、そこは、共に嵐によってそこに流された、アレクダンダー大王の艦隊の指揮官と、ティベリウス・クラウディウス・カエサル時代のローマ市民を除いて、いまだかつていかなるエウローパ人も到達したという証拠のない地点だからである」（pp.3-4）⁴⁷。

ラムージョ版ではこれと同じような内容のものが、一番最後に置かれてある(p.820)。

3. 古代ギリシャ・ラテンではアラビアをデセルタ（砂漠の）、ペトラエア（岩の）、フェリクス（幸せの）と分け、それぞれシリア砂漠地帯、シナイ半島から今のヨルダン南部、アラビア半島部を指した。コンティのルート、ダマスカスからバグダードへは、ペトラエアではなくデセルタにあたる。

4. 古代のバビロニア市はエウフラテス川のほとりにあったが、後世に再建されたのはティグリス川沿い。

5. 当時の西・中央アジアはティムール没後の帝国下にあり、メソポタミア地方の支配者は同朝第三代君主シャー・ルフ(1409-47)。

6. モーロ人：ムーア人のことだが、ここではアフリカ系ムスリム一般を指すとみられる。なお、この語は英語版にはない。

7. ブラッチォ：腕の付け根から指先まで、約60cm。キュビット：肘から指先まで、約45cm。

8. ビジナガル：南インドのヒンドゥー教ヴィジャヤナガル王国(1336-1565)の首都。七重の城壁に囲まれた要害堅固の地にあったことが知られる。

9. マラパールはインド半島南部西岸、マイラパールのある東岸はコロマンデル。

10. タリポットやし。

11. セイロン島は、北部をヒンドゥー教徒、南部を仏教徒が支配していた。

12. 古代にタプロバーナと呼ばれたのはセイロン島。

13. アンダマン諸島と黄金半島（アウレア・ケルソネースス、今のマレー半島）との混同か。

14. ビルマのテナッセリム市。

15. このエピソードの箇所は、英語版ではラテン語のまま残されている。

16. 英語版には欠落なし。

17. マンジ（蚕子）は、マルコ・ポーロその他では中国南部のことだが、コンティではインドシナ半島北部、シャムを指す。ラムージョの思い違いか。

18. プリニウス『博物誌』第8巻第8章。

19. 白象は仏陀の前世と考えられ、ヒンドゥー教では支配者の象徴だった。

20. 仏教で最も尊敬すべきものとされる三宝（仏・法・僧）のことを混同したものか。

21. 中世ヨーロッパでは、一角獣の角は解毒作用があると信じられた。

22. この中国についての記述は全面的にマルコの書に依拠しており、それがコンティによるものか、それともブラッチォリーニによるものか不明。コンティは中国に至っていない。

23. E:Nemptai, 意味不明。

24. E:Xeitona, ミラネージによればビルマの川シッタン Sittang のこと。それをザイトン（マルコの泉州）と誤ったのは、ニコロが中国にまで至ったと推定した訳者ラムージョの早とちり。

25. この文は英語版にはない。

26. 英語版に欠落なし。
27. ジャワ島とボルネオ島。
28. ニューギニアの極楽鳥のことか。
29. ナツメグとマチスはバンダ諸島とアンボン島のみ、チョウジはモルッカ諸島のみ産した。マチスはふつうナツメグの花と称されるが、実際はその種子の外皮。
30. エルは45インチ、約115cm。
31. 以下の文は英語版にはない。
32. この文は英語版にはない。
33. I:Icippe; E:Icepe. 意味不明。
34. I:Bancani; E:bachari. 聖職者ではなくカーストの一つ。
35. ソコトラ島はアフリカ・ソマリア半島沖、アデン湾入り口の島。後述のネストリウス教徒はすでに数少なかった。
36. ソコトラ島に近いとすれば、兄弟島もしくは姉妹島と呼ばれたアブドゥール・クリ島。
37. 「天と大気の配剤により」は、英語版にはない。
38. これは、『航海・旅行記集成』ではコンティの旅行記に前置されている。
39. ラムージョが「25年」とする根拠は不明。
40. エウゲニウス4世(1383-1447,在位1431-47): ヴェネツィア人 **Gabriele Condulmer**. 東西両教会合同のための宗教会議を開催したことで知られる。同会議がフィレンツェで行われたのは1439年であり、したがってコンティの帰国も1444年ではなくその年のことと考えられる。
41. ポッジョ **Poggio Bracciolini** (1380-1459): 多くの古典を発掘したことで知られるフィレンツェのユマニスト。1423-53年教皇秘書官、1453-59年フィレンツェ共和国書記官。
42. エマヌエル1世 (在位1495-1521): ヴァスコ・ダ・ガマ、カブラル、コルテ・レアル、アブルケルケらの航海を支援したポルトガルの絶対君主。
43. 注1参照。
44. インド・カンバイア地方がムガールのスルタン、フマユンによって征服されたのは1535年。

45. 一度目は1434年5月、共和国の再建を求めるローマ市民の反乱にあい、変装してフィレンツェに逃げたおり。5カ月間の共和国の後、教皇権力が市を取り戻した。

46. コンティが信仰を捨てたのはその旅の最後とは考え難く、弁解の臭いが強い。

47. 「アレクサンダー大王の艦隊の指揮官」とはネアルコスのことだが、彼はインダス川以東には至っていない。「一ローマ市民」とは、プリニウスに記される、紀元後6年頃嵐でセイロン島に漂着した紅海の徴税請負人アンニウス・プロカムス。ここにマルコ・ポーロへの言及のないことは興味深い。ブラッチョリーニが彼のことを知らなかったとは考え難く、とすれば、その旅のことを信じていなかった、あるいは両者の地理関係がよく理解できなかったためか。

図2 ポッジョ・ブラッチョリーニ (1)

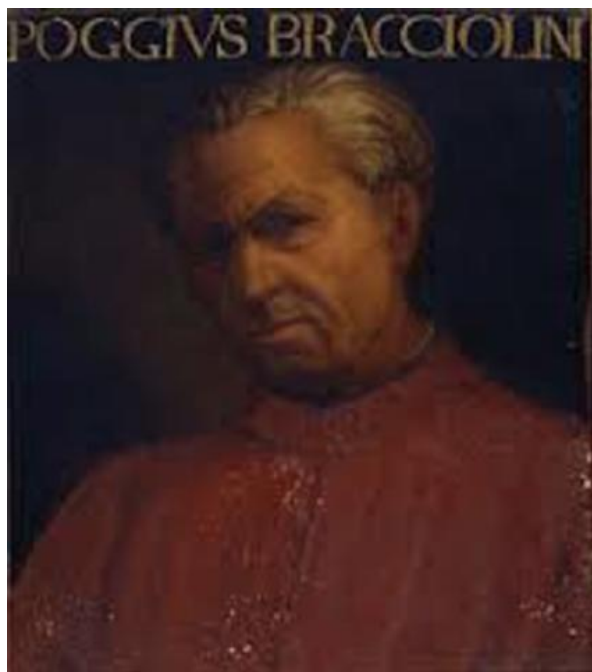


図3 同 (2)





図4 エウゲニウス4世 (1)
London, British Library,
Harley 1340, f. 11v.



図5 同 (2)
Siena, Duomo Santa Maria Assunta,
Libreria Piccolomini.